

# 天使

PER CARITATEM  
AD VERITATEM

vol.32 March 2022

T E N S H I C O L L E G E

## 学校法人藤学園との法人統合に向けた協議会の設置について

学校法人天使学園 理事長 松岡 健一



平素より、天使大学の教育活動にご理解とご協力を賜り、心からお礼申し上げます。

さて、学校法人天使学園（以下、「本学園」という。）は、昨年の理事会において学校法人藤学園（以下、「藤学園」という。）と2024年4月1日の法人統合を目指して協議することを決議し、2022年1月19日に「法人統合協議会設置の覚書」を締結したことを、本学園関係の皆様にお知らせいたします。

ご承知のとおり、本学園のルーツはマリアの宣教者フランシスコ修道会（以下、「FMM」という。）であり、藤学園のルーツも殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会であり、奇しくも聖フランシスコの愛の教えを等しくルーツに持つ両学園は、これまでもカトリック教育機関として互いに協力関係を築いてまいりました。

今日、我が国においてはカトリック教育の継承が課題となっているため、ともにカトリック精神を建学の理念とする両学園は、カトリック教育の維持・継承と、将来の少子化等に備え、安定した経営基盤を構築するために、財務状況が比較的健全なうちに法人統合することを目指して、基本的な事項について合意し、法人統合に向けた協議を開始することとしました。

1908年にFMMから7名の修道女が札幌へ派遣され、開拓民のための施療所（現在の天使病院）を開設しました。その後、1947年に天使大学の母体となる札幌天使女子厚生専門学校が設立されて以来、「愛をとおして真理へ」の建学の理念に基づいて教職員の皆様のご努力により看護師、管理栄養士、助産師及び保健師の専門職業人を育成し、少なからず地域社会に貢献してきたと考えております。

今後、大学進学者数は2040年には現在の80%程度になると推計されており、将来の大学経営に与える影響が懸念されています。本学園の理事長として、本学の伝統に裏付けられた強みを伸ばし、厳しい社会環境の変化に適切に対応し、新法人の将来展望を広げる可能性の基盤づくりに挑戦したいと考えています。

新たな法人名称に「藤」と「天使」の名称を含むことや両学園の設置校である各大学、高校等についてはそのまま存続することとしています。天使大学は大学名及び学部・学科、研究科などの組織を変更せず、これまでどおりの教育を継続いたしますので、学生の皆様の本学における学びには、一切影響することはありません。

また、天使大学後援会や天使大学同窓会の名称や組織を変更する必要はございません。

両学園は、双方の歴史と大学等の各設置校の運営を尊重し、法人統合により双方の学校運営に支障が生じないよう、特に学生が最大の受益者であることを十分考慮して協議に臨んでいく考えです。

今後、協議の進捗状況につきましては、折に触れて皆様にもご報告させていただきたいと考えておりますので、ご理解とご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【学校法人藤学園】

理事長 永田淑子

所在地 札幌市北区北16条西2丁目1番1号

設立母体 殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

沿革 1925年 札幌藤高等女学校を開設

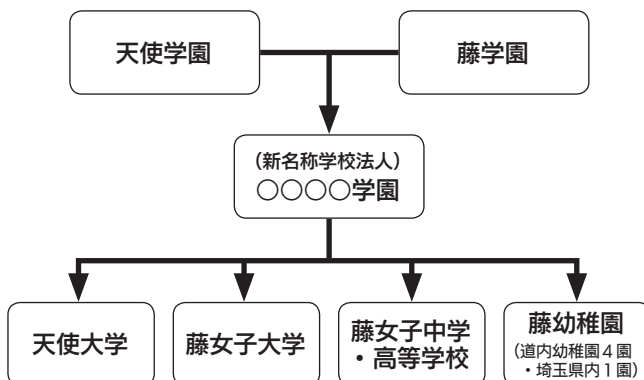
1937年 藤幼稚園を開設

1948年 藤女子高等学校・同中学校を開設

1961年 藤女子大学文学部を開設

1992年 藤女子大学人間生活学部を開設

### 法人統合



## 学びの振り返り

### 実習できたことで学びの多かった1年

助産研究科 助産基礎分野 前垣 そのか



昨年はコロナの影響でほとんどの授業がオンライン講義となり、実習も学内実習に変更になったという話を先生や先輩方から聞いていたため、今年はどうなるのだろうかと不安を抱きながら学校生活が始まりました。しかし、先生や事務の方々が感染対策に関する様々な取り組みをしてくださったおかげで、幸いなことにほとんどの講義を学内で受

けることができ、6月からの基礎実習、11月からの統合実習もコロナワクチン接種を済ませ、毎日の検温、体調管理を行いながら実習することができました。もちろん、感染対策が優先されるので制限されることもいくつかありましたが、大学に集まって友人や先生と技術練習できたり、実際に病院で妊産褥婦さんや赤ちゃんに関わらせていただいたことで講義や演習で学んだ知識と技術を高めていくことができ、良い環境の中で助産を学ぶことができていると感じています。特に統合実習1では、多くの学びがありました。初めはどんどん進行していく

お産の経過に頭も体もついていくことができなかつたり、褥婦さんや赤ちゃんとの関わりの中で自分の無力さを感じるなど落ち込むことも多かったです。しかし、助産師さんや先生からの指導を受けながら、例数を重ねるごとに少しずつ考え方が身につくアセスメントができるようになるなど成長できた面もありました。このように実際に妊産褥婦さんや赤ちゃんに関わらないと学ぶことができなかつたことが多くあり、改めて病院実習できることのありがたみを感じ、一つ一つ真剣に取り組むことができたと思います。

この1年の学修を通して、助産師としての専門的知識・技術を学ぶことはもちろん、助産師という仕事の責任の重さも肌で感じることもできました。現在、コロナの影響で予定通りにならないこともありますが、実習の中で挙げられた自己課題を少しでも改善し、責任をもって助産できるように、残り1年、積極的に学習を進めていきたいと思っています。

### 現地に赴き、体験することで得られるもの

看護学専攻 保健師コース 品田 夕静



私は昨年、天使大学の看護学科を卒業し、そのまま大学院の保健師コースへと進学しました。現在は同級生と二人で、お互いに助け合いながら、保健師を目指して日々勉強に取り組んでいます。

1年次の前期は毎日膨大な授業や課題に追われながらも、学部で培った基礎知識を礎に、より専門的な知識を身につけました。

また、事例検討やロールプレイ等を通して、具体的な支援方法について吟味し、実践的な能力の獲得に向けて学習を深めました。

6月には島しょ地域での現地実習が予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、遠隔での実施になりました。島での暮らしは医療や社会資源が限られており、住民同士の関係性も密になっているという特徴があり、都市部との健康課題の違いや、地域の特性が健康に及ぼす影響について、学ぶことができました。現地の保健師の方々から、限られた資源を駆使して、住民との信頼関係を築きながら支援を行っていることがわかりました。

後期の実習では実際に地域に赴き、約1か月間現地で生活をしながら、地域アセスメントや、現地の保健師の方々の業務、住民の方々と接することを通して、保健師に求められている役割・機能について学びました。実際に町で生活することで、事前に下調べした学習だけではわからなかった町の強み、地域特性、健康課題を体感することができ、現地に赴く重要性を知りました。また、第一子を出産されたご家庭への訪問実習では、コロナ禍で外出や人との交流に制限がある中でも、感染予防を実施したうえで育児に関する情報交換や思いを話し合う場の設定、息抜きの方法を確立するなど、工夫しながら生活されていることを知りました。

現在感染症の流行が拡大し、様々な制限が設けられる中でも、地域の方々がかみ身とともに健康に安心して生活できるような支援を今後行っていきたいと感じました。生活様式が変化しても、人や地域との繋がりを大切に、住民の方が自身と家族の健康を維持・増進できるような支援や地域づくりを行うことができる保健師を目指して、これからも励んでいきたいと思っています。

### コロナ禍で学んだこと

栄養管理学専攻博士前期課程 北所 朋実

私は現在、「若年女性のやせとその関連因子」について研究しています。元々日本は先進国の中でも痩せている女性の割合が約20%と非常に高い傾向にあります。彼女たちの将来には骨粗鬆症、低出生体重児出産のリスクがあり、子にはそれに伴う生活習慣病発症リスクの増加等、大きな社会問題になる可能性があります。コロナ禍で、直接的な人との繋がりが希薄になった事によって生じてきた問題と合わせ、より複雑で深刻なものになるのではないかと感じています。

マスク、手洗い、うがい、消毒液とソーシャルディスタンス、三密の回避、外出自粛から始まった新型コロナウイルスとの闘いも、今年で3年目になります。外出自粛からは解放されつつある事が喜ばしい反面、気を引き締めなおさなければと分かってはいますが、Googleマップに500件以上保存した「行きたい店」巡りを完全に辞めるのは厳しいというのが本音です。この一生涯で巡り切れるか怪しい数になった訳はコロナ禍にあります。

コロナ禍になった当初、当時大学4年次だった私は国家試験の勉強と就職活動の準備、臨地実習等に自宅で取り組んでいました。友人たちとはほとんど直接会う事が出来ず、本来プライベート空間であるはずの自宅で、今までは友人たちと支え合いながら行ってきたそれらに一人で取り組む毎日に鬱々とし始めた頃、ふと思い立ってGoogleを使って今まで行ったことの無い国や場所を見る「リモート旅行」をする事にしました。最初は海外の街並みを見たり、ヴェ

ルサイロ宮殿などの有名な建築物の中を散策したりしてそれなりに楽しんでいましたが、日を追うごとに海外から国内、道内、市内、という風に範囲が狭くなり、旅行というよりも散歩に近いものになっていきました。海外の空気が感じられるオシャレな街並みが日本の見慣れた街並みに変わったからと言って飽きる事はなく、むしろ没頭していました。道を進めば進むほど、芋づる式に行ってみたくてという気持ちになる場所が出てきてしまい、気づけば500という大台を突破しました。今は空いた時間に少しずつお店を巡って過ごしています。中には残念ながら閉店してしまったお店もありますが、収束後は市内にはない所を中心なるべく全ての場所を訪れる事が私の夢です。

このコロナ禍で学んだ事は、没頭は最大のストレス解消法であるという事です。私の場合、コロナ禍によって今まで感じたことの無い様々な種類、量のストレスが蓄積しましたが、リモート旅行に没頭した事で新しい楽しみを見つけられる事が出来ました。少々終わりが見えかけてきた所に再び新株という脅威が現れた事に気持ちが沈みますが、リモート旅行と同様、感染対策に没頭していれば収束も夢ではないのかなと思います。少しでも行ける場所が減らないよう、また友人たちと他愛ない会話をしながら食事をする日を楽しみに、マスクと消毒による肌荒れや手荒れ等と戦いつつ今日も一人黙食で「行きたい店」巡りをしてみたいと思います。

## 「天使大学に通っている」と、胸を張って言えるようになった自分

看護学科4年 山川 未知

入学当初、「天使大学に通っている」と胸を張って言えない自分がありました。第1志望の大学に落ちた私は、周りと比べてどこか引け目を感じていたのだと思います。しかし学生生活を送るうちに、いつの日かそう感じることはなくなりました。今思うとそれは、愛をとおして真理へという建学の精神のもと、仲間と共に切磋琢磨し乗り越えた学生生活があったからだと思います。

天使大学では豊富で確かな知識・技術に加えて、自ら学習する姿勢を学ぶことができました。その結果より幅



事例研究発表

広く、根拠ある知識を習得することができました。また、学生生活では他大学に比べて、「心」に着目することが多い印象を受けました。授業・演習・実習では常に患者さんとそのご家族はどう感じ

ているかという視点で考え、自己の看護実践に活かしていました。その結果、次第に心のもった看護を提供するにはどうすれば良いか自ら考え、実践する力が身に着きました。さらに私たちは新型コロナウイルス(COVID-19)の影響で、苦渋の日々を味わいました。授業も実習もオンラインになり、「このままで看護師になれるのだろうか」と、孤独と不安でいっぱいだったことを思い出します。しかしそんな時、私には電話やSNSを通じて互いに励まし合う仲間がいました。直接会うことはできなくとも、心のつながりがあることで困難な状況を乗り越えることができた経験は、同じ大学で看護師を目指す仲間の大切さに気づかせてくれました。

このように、私は天使大学で知識や技術に加え心のもった看護、そして仲間の大切さを学ぶことができました。これらの学びは、「愛をとおして真理へ」と導く看護を教えてくださいました先生方や、思いやりのある仲間がいる天使大学だからこそ得ることができたと思います。そしてこのような経験をした私は、就職活動をしている時、「天使大学から参りました、山川未知と申します。」と胸を張って言っていました。いつの間にか、天使大学に通っていることを誇りに思っていたのだと思います。4年間の学生生活を通して、私は天使大学に入学して良かったと心の底から思うようになりました。



## 人との繋がりの大切さを学んだ1年

栄養学科4年 服部 環子

今年は、新型コロナウイルスによる制限は未だにあるものの、昨年に比べ人と会う機会が増え、人との繋がりの大切さを改めて強く感じた1年だったように思います。振り返ると今年はず、6月に控える教員採用試験対策から始まり、先生方に何度も面接練習を見ていただき、友人と毎日学校に残って面接練習や試験勉強を行いました。試験対策は辛いことも多くありましたが、同じ目標に向かう仲間がいたから最後まで頑張りきることができました。

また、6月は小学校へ教育実習に行きました。コロナ



企画したお弁当の学内販売

ウイルスの影響で実習前に行う模擬授業を自宅からZoomで行わなければならなくなるなど実践的な練習があまり出来なかったことに対する不安を感じながら初日を迎えましたが、実際に対面で子ども達に授業をし、生の反応を見られたときの嬉しさはコロナ禍だからこそより強く感じる事ができたのだと思います。給食経営や食に関する指導など現場でしか学ぶことのできないことを沢山学び、大学で得た知識を深めることができました。

さらに、今年は1年次の頃から続けている子どもに対する食育を行うNPO活動にも力を入れることができた1年でした。未知のコロナウイルスに右往左往した昨年を経て、今年は子どもたちへの食育授業の配信や、子どもたちが考えたおかずを詰め込んだお弁当の商品化などコロナウイルスに対応した活動を行うことができました。コロナウイルス流行以前に思い描いていた活動とは違う形ではありましたが、どれも今だからこそできた貴重な体験であり、日々変わる情勢に臨機応変に対応する力が必要だということも学ぶことができました。そして、完成したお弁当はお弁当屋さんや学内で販売させていただきました。最終的に300個程のお弁当を販売することができ、大きな達成感が得られました。

この1年の経験は、どれも多くの方の支えがなければできなかったことでした。これから社会に出ても大学で出会った仲間との繋がりを大切にしていきたいです。



## 専門職への誓い～看護学科～

### 戴帽式

#### 貴重な経験から得られたこと



看護学科2年 安藤 こと葉

私は11月25日に行われた天使大学の戴帽式に参加しました。未だ続くコロナ禍の中で参加することの出来た貴重な体験から得られたこと、学んだことを述べたいと思います。

1つは現在のコロナウイルス流行の状況下で私たち看護学生がいかに多くの方に支えて頂いているのかということです。私たちは天使大学に入学した当初からコロナウイルス流行の渦中にありました。そのため1年次の間は入学式をはじめとする行事も行えず、ほとんどの授業をオンラインで受講してきました。大学に通えないばかりか、共に学んでいる同級生の顔も分からない日々が続き、これからの大学生活について不安に思うことも多かったと記憶しています。それから1年が経ち、徐々に対面授業も増えて学生生活にも慣れてきましたが、依然としてコロナ禍による脅威は続いており、学年全員が一堂に会するのは難しい状況だと感じます。そんな中多くの先生方や係の方が協力し戴帽式の実施に向け動

いて下さいました。そのおかげでコロナの脅威を感じることなく戴帽式という一度きりの経験をすることが出来ました。

もう1つは看護職を目指す人間としての自覚です。上述した通り、私たちは入学以降コロナによって活動を制限せざるを得ない状況であり、看護学生にとって最も重要といえる実習も中止やオンラインでの実施となっています。私は大学生となって以降、日々学ぶべき知識が増えていく反面、自身が将来看護師として働くイメージを中々掴めずにいました。しかし今回、戴帽式を経てナースキャップを頂いたことで改めて自分が憧れた看護師の姿をそこに見出すことが出来たと感じています。ナースキャップの授与やキャンドルサービス、誓いの言葉など、式中の様々な場面を通して看護師という職業の持つ責任を感じ、身の引き締まる思いでした。

この2点をはじめ、戴帽式を経験して得られたものは多くありました。この貴重な体験を無駄にしないよう今後の学生生活も意味のあるものにしていきたいと思っています。

#### 愛をとおして浸透する看護の精神



看護学科2年 筒井 千香子

最初に、戴帽式を対面で行う努力をしてくださった方々に感謝します。コロナの感染対策に留意しながらも、たくさんの方々の関係者の人々の努力のおかげで対面での戴帽式を執り行って下さり本当にありがとうございました。天使大学での素敵な思い出がまたひとつ増えました。

とは言いましても、実際に戴帽生として式典に参加させて頂くまでは、戴帽式への憧れもあまりなく、遠隔での実施でも良いのではないかと、オンライン授業に慣れきっていた私自身は思っていました。しかし、実際に式典が始まり戴帽の儀、100人でのキャンドルサービスには胸を熱くさせられました。100本のキャンドルが一度に灯る光景は、私たちの心でこれからの看護師としての道を照らすことなのでしょう。

ところで皆様は戴帽式の由来をご存知ですか。戴帽式は、西欧の宗教文化に起しており、修道女は次の冠を被りその一生を神に仕えることを誓うというものです。看護学生にとって次の冠は看護師のシンボルであるナースキャップであり、それを被りキャンドルを灯すことで看護学生は、クリミ

ア戦争中の病院で蝋燭を片手に兵士たちの看病をしたナイチンゲールの献身的な看護の精神を受け継いだこととなります。私たちは看護学原理を教えて下さった教授からキャップを戴帽して頂いたことも相俟って看護学の理念を思い出しながら看護の精神を受け継げたような気がします。

戴帽式を振り返りこの様に感じることができるのも、前もった準備があったからこそです。天使大学では戴帽式に備えて2日間の修養会が設けられており、自身の看護師像を明確にする・「愛」について考える、機会が与えられます。私は「愛」について考えるために神父様が聖書から引用した「コリント人への手紙」と「平和を求め祈り」の2つの内容とそれらの意味を考えることで、「愛」とは、全てをゆるし、受け入れることではないかと考えました。これは看護師だからできるという事ではなく、2人以上の人が関係し合う場で誰しもが行えることです。なので私は、愛することのできる人を基盤に看護技術を身につけた看護師になろうと決意し専門職者としての新たな一歩を踏み出しました。看護学を学び始めてまだ2年、この先も長く続く道のりですがこの決意を忘れることなく、愛ある看護を届けていきたいです。



## 専門職への誓い～栄養学科～

### Food and Life Step-up Ceremony

#### 支えられていることの実感

栄養学科2年 今 雪乃



今年は、1年次では開催することができなかった、修養会・ステップアップセレモニーを開催していただき、その様な成長の機会に参加できたことを嬉しく思います。

私たちは、コロナ禍での入学であったため、オンライン授業を中心に、大学での学修に取り組んできました。慣れない大学生活の中、新しい友達を作ることが難しく、少し寂しい思いをした時期もありました。

しかし、少しずつ対面授業が増え、学年の全員と関わることは出来ませんでした。分散登校を通して、大学での新しい友達と仲を深めることができました。

そのタイミングで私たちは、ステップアップセレモニーという、学年全員が参加し、交流することが出来る機会を得ることができました。

ステップアップセレモニーでは、グループワークやランタン作り、感謝のミサ、セレモニーを四日間の日程で行いました。

グループワークでは、クラスの分け隔てなくグループ分けされていたため、分散登校では関わる事が出来なかった人とも初めて話すことができ、一緒に同じ目標に向かって学修に取り組んでいる仲間がこんなに沢山いたんだということを強く実感しました。

さらに、グループワークを対面で行ったことで、自分以外の意見を聞くことができ、同じ議題についても、自分にはなかった新たな視点から捉えることができ、そこから考えが発展し、議題に対する考えがより深まりました。

感謝のミサやセレモニーでは、大学に入って初めての大きなイベントであり、スーツを着て挑むことで、程よい緊張感もありました。

聖書の一節を皆で読み、自身で考える時間を得ることができ、改めて自分は両親や友人、教員など、多くの人に支えられて生きていることを強く実感しました。また、隣人を愛すること、つまり、相手に寄り添うことの大切さを学び、自分は、相手に寄り添うことができる管理栄養士になりたい、目標を実現させるという気持ちが強く芽生えました。支えてくれている人に感謝し、自分の目標に向かって、あと2年間、学習により一層励む決意と繋がりました。

全体を通して、同じ目標に向かって学修に励む仲間存在を知り、その仲間から新たな視点を得て、自分は何をするために天使大学に入学したのかを再確認することができたため、とても有意義な学修行事であり、参加してよかったと感じました。

#### 当たり前の大切さ～コロナ禍を過ぎて変わったこと～

栄養学科2年 宮嶋 楓果



大学に入学する頃に猛威を振るい始めたコロナは、約2年たった今でも終息することはなく、沢山の生活を制限せざるを得ませんでした。新しい友達関係を築くこと、サークルに入ること、一緒に授業を受けたり行事に参加すること等、思うようにできない時間が続いていました。

さらに、大学での授業はほとんどがオンラインの授業で、一部の実習系の授業は対面で行われましたが、時間も人数も限られた中で行われていました。このような生活を1年次の頃から続けていると、「自分は何のために、何をしたいか、天使大学に来たのだろうか」と思うことがこれまでに何度もあり、頑張る目標を見失ってしまっていました。

そんな中、10月にステップアップセレモニーが行われ、大学に入って初めてちゃんとした行事と言えるような行事に参加しました。大学に入る前からこのステップアップセレモニーはとても素敵だと思って楽しみにしていたものの、正直なところその頃は完全に勉強に対するモチベーションがなく、話せるような友達もあまりいなかったため、そんな

中で行事に参加して何か変わるのだろうか、あまり前向きな気持ちではないまま当日を迎えました。

しかし、そんな後ろ向きな気持ちはすくなくなりました。入学式に着る予定だったスーツをこの日初めて着た時、「これからセレモニーに参加するんだ」と、すごく気が引き締まったのを覚えています。セレモニーが始まり、式が進むにつれ、大学生活の折り返しに来たことを実感するとともに、私が管理栄養士になりたい理由や、天使大学に入学した目的など、忘れかけていた大事なことを思い出すことができました。

授業は学校でみんなで受けることが当たり前で、毎日友達に会えることが普通だと思っていたコロナ前から、一人で家で授業を受ける孤独な日々が一気に変わったからこそ、今までの当たり前をより大切なことだと感じるようになり、気持ちを入れ替えることができたのだと思いました。これからも一日一日を大切に、残りの学生生活を過ごそうと思います。



## この1年を振り返り 実習での経験を経て考えたこと



看護学科3年 山田 佳永

今年度も昨年度と同様、コロナ渦での学生生活を余儀なくされました。前期は遠隔授業が多く、歯がゆい気持ちを感じましたが、後期はほとんどの授業が対面で行われ、何より実習で2週間病院に行けたことが、大きな実りとなったのではないかと感じます。

3クールある実習のうちの2クールは、緊急事態宣言の影響により学内実習となりましたが、1クールは病院実習を実施することができました。今までは紙面の事例患者に対して看護を展開してきましたが、初めて実際の患者さんを受け持

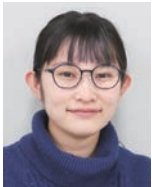


回廊で友人と談笑

たせていただき、日々患者さんの体調が変わる中で、患者さんのニーズに合わせたケアを提供することの難しさを痛感しました。またこれまで、コロナの影響もあり、学内で看護技術の練習をする機会に恵まれず、技術面に対して不安を持ったまま実習に臨むこととなりました。結果、自身の技術不足によってケアの時間を要してしまい、患者さんに対して安楽を提供するためのケアが、患者さんにとって疲労感を感じる時間になってしまったのではないかと悩み、自分の不甲斐なさを感じて自己嫌悪に陥ることが何度かありました。しかし、ケアを実施する中で患者さんが、「気持ちいいよ」、「またやってほしい」と話してくださったり、積極的にコミュニケーションを取ることで、患者さんの趣味・嗜好や背景を知ることができたため、自分の現時点での”できていること”と、“苦手としていること”の両方を知ることができた充実した実習となったのではないかと感じています。

来年度は最終学年となり、長期間の実習や就職試験、国家試験の勉強など、たくさんのことを同時に進行していくため、上手にこなしていけるのか、不安な気持ちも多くあります。しかし、新型コロナウイルスの終息を願い、今年度の実習を含めた今までの学びを十分に活かして、将来に向けた意味のある一年にしていきたいと思います。

## コロナと向き合いながらの大学生活



看護学科1年 馬場 紗江

私が高校2年生の冬に新型コロナウイルスがパンデミックを引き起こし、新型コロナウイルス感染症により、マスクが手放せず、多くの人が集まるのが難しい状況のなか、大学生としての生活が始まりました。

入学して約2ヶ月は対面授業と遠隔授業のハイブリッドで講義を受けていましたが、どんどん感染者数が増えていき、対面授業が遠隔授業に切り替わりました。大学の方針に従い、不要不急の外出を控えたため、自宅にいる時間がほとんどを占めました。新型コロナウイルスにより、高校生の頃

に思い描いていたような大学生活は送れず、窮屈な生活を強いられました。それは、私だけでなく多くの方がそうであったと思います。今では、ワクチン接種が進み、大学でも殆どの方が接種完了しているため、元のハイブリッド授業に戻り、遠隔で行っていた講義も対面で受けられるようになり、大学で講義を受ける機会が増えたことはとても幸せなことであると感じています。

大学に入学し、よく一緒に帰ったり、遊んだり、話したりする友人ができました。入学してすぐに、学年全員で集まり自己紹介を行う機会を設けて頂いた際に、趣味が似ていたことをきっかけに仲良くなりました。友人たちとは、Zoomを利用して一緒に課題を行ったり、演習や実習前に持ち物や時間、確認事項などを話し合ったりとお互いに助け合いながら楽しく学んでいます。時に将来の不安を言い合ったりすることもあるくらい仲良くしてくれている良き友人たちです。

あと少して、大学1年次が終わり2年次へと進級すると思います。2年生に進級するにあたって、進級前の春休みには前期、後期と苦戦した形態機能学と、基礎看護学技術論で学んだことを復習することを目標に勉強していこうと考えています。

最後にはなりますが、新型コロナウイルスにより苦しい状況のなか、学生生活の支援、授業の協力をして下さった大学関係者の皆様、病院関係者の皆様、家族には心から感謝いたします。



渡り廊下で友人と待ち合わせ

## 新しい日常を過ごす

新型コロナウイルスが流行してから二年ほど経ちました。マスクの着用やオンライン授業の導入、大人数での会食の自粛など、当初は異様な光景に思えたものが今では当たり前になり、コロナ禍での生活が「日常」に変わりつつあります。今年度は徐々にコロナと共存していく生活へシフトしていった一年でした。また、大学においてもコロナと共存し、「出来ることを出来る形で行う」という考え方が主流になりつつあると感じています。その一例として、今年の臨地実習は学内実習、学外実習、学内実習と学外実習を合わ



マリアホールで友人と歓談

栄養学科3年 藤本 桃佳



せたハイブリット型実習の三種類に振り分けられ、今までにはないような形で行われました。全員が学外の実習に行けたわけではなく、学外の実習であっても感染対策のために制限がかけられるなど、例年通りとは行きませんが、昨年度よりは実習らしい実習ができたので、ほっとしています。その他にも、対面とオンラインを併用した新しい授業スタイルや、感染対策を取りながら対面でのサークル活動実施など、激動の時期であった昨年度に比べ、「今出来ること」に目を向け、前向きに過ごすことができたと思います。これらは全て、コロナ禍であってもたくさんの学びや経験を得て欲しいという教職員の方々や、その他様々な方々のご支援あつてのことで、とてもうれしく思っています。

これからしばらくの間、今のように感染の状況を見ながらの生活が続くと思われます。

コロナ禍での学修は難しいことも多いですが、コロナ禍であったからこそ人とのつながりをより強く感じ、学べたこともたくさんあったと感じます。不満や不安が全くないとは言えませんが、「新しい日常」としてこの生活を受け入れ、置かれた状況を楽しみながら残りの学生生活を有意義なものにしていきたいと思っています。

## 「学習」と「学修」

執筆のお話をいただいた時、私は改めて自分の立場を実感することになりました。提示されたテーマは「この一年の学修を振り返って」です。この文章を書くのかもしれない一年前の高校生時代だったならば、振り返るものは「学修」ではなく「学習」だったでしょう。授業によって学問を習うだけではなく、前後に伴う活動へも自ら取り組むのが大学生のあるべき姿なのだ、その表現の違いから考えさせられたのです。

今年度も新型コロナウイルスの影響により、オンラインでの授業がほとんどを占めていました。オンライン授業は通学の手間が省けたり、課題に取り



仲間とオンラインミーティング

組む時間を調節できたりと利点もたくさんあります。しかし、対面の授業と比べるとどうしても緊張感が薄れ、気づけば手には携帯が…ということ

栄養学科1年 巖田 唯華



も少なくありません。そんな誘惑もある中で予習や復習、演習を行うというのはやはり難易度が高く、自分の中の悪魔と戦う日々でした。自分でこの学問を学びたいと選択したのにも関わらずいざ課題として目の前に現れると逃げたくなってしまうのです。

こうして振り返ってみると、今年私は「学修」を行うことができているのかとても不安になります。オンラインという見張りのない環境に慣れ、学ぶべき学問と深く向き合えなかったようにも思えます。大学の勉強は今までと違って、全てにおいて自己責任です。怠惰の道に進んでしまった時、喝を入れてくれるのは自分しかいません。今年はコロナ禍であること、大学に入れたという安心感に甘えすぎました。私たちはもう「学習」ではなく、「学修」として学問を身につけなければならない大学生なのだということを来年度は意識していきたいです。

ここまでシビアな内容を書いてしまいましたが、大学生生活は本当に楽しいです。高校生の時以上にたくさんの人と関わることができ、いろいろなことへ挑戦する機会もいただけます。もちろん勉学に取り組むことも大切ですが、大学で得られるものはそれ以外にもたくさんあると思います。今しかできない取り組みで「学修」することも、来年度は充実させていきたいです。

## キリスト教カトリックの専門職業人とは

## 内面の成長を重視し、愛をとおして人を支える

天使大学 司祭 ケン・スレイマン



私にとってカトリックの理念で養成する看護職・管理栄養士職の大事なことは、「目的」です。また、カトリックの目的は「愛」です。なぜなら、「神様が愛だから」です(第1ヨハネの手紙 4章8節)。私達人間は、神様の娘・息子であるため、私たちも神様のよう「愛」を持っています。人生の中で最も価値あるプレゼントは「愛」です(第1コリントの信徒への手紙13章13節)。聖書は神様と人々の愛の物語です。他の動物は本能をとおして人生を過ごしますが、人間だけ自由意思を持ちながら人生を自ら意思決定します。それは素晴らしい機会であるとともに、重い責任もあります。人生の中で最も大切な意思決定は、「誰を愛するか」、「いつ愛するか」、「どこで愛するか」、「なにを愛するか」、「どのように愛するか」ということです。聖書の中で、イエス様とマリア様以外の人物は、このような問いに対して人生の中で葛藤しました。現代の私たちも聖書の物語の一部です。なぜなら、聖書の物語は終わりのない物語であるからです。看護職・管理栄養士職は、この聖書から始まった愛の伝統を自分の専門職者としての実践により、受け継いでいきます。

大切な問いは、カトリックとしての「愛」は何かということですが、一般的な「愛」は感情です。これは、人気のアイドルや美味しい食べ物に対して生じる気持ちであり、これは「自分から表した愛」です。この「愛」は、日によって違うかもしれません。しかし、「キリスト教の愛」は神様からの贈り物です。そして自由意思をとおして受け取ります。このような「愛」を理解するために、マリア様とイエス様の人格を示す必要があります。

マリア様は聖ルカによる福音で初めて聖書に登場します。1章の中でマリア様は天使ガブリエルに会います。神様が天使をとおしてマリア様にメッセージを送ったためです。それは、「イエス様の母親になる」というお願いです。マリア様は「Let it be to me according to your word. (私も同じ心です)」といい、賛成しました(38節)。そのマリア様の答えから、二つの学びがあります。一つ目は、「まだ生まれていない子供のための愛情」です。二つ目は、「神様の計画のための愛情」です。マリア様の愛の特徴は自由意思で、相手にとってより良い選択をしています。イエス様は33歳まで生きましたが、最初の30年の人生については記録されていません。この30年の中で

唯一わかることは、養父であるヨセフ様から大工仕事を学び、大工として生きていたということです。30歳で突然大工の仕事を辞め、その後は人々を救うためにご尽力されてきました。例えば、勇気づける言葉をかけたり、病気を治したり、お腹が空いている人々に食事を与えたり、祈りの方法を教えたりしました。これは限りない愛の模範です。また、イエス様は当時の宗教指導者達やローマ帝国の嫉妬によって、自分の命を捧げました。イエス様の人生も死も、プレゼントでした。聖ヨハネによる福音の中で、イエス様の言葉が記録されています。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネによる福音15章14節)。

このマリア様とイエス様の背景から、現代の看護職、管理栄養士職の学生達を育てるという仕事は、相手のための素晴らしい愛の業だといえます。それと同時に、この仕事は神様への愛をとおしての捧げものでもあります。それは隣人の愛です。すべての人間は神様の娘・息子であるため、私たち専門職が任された患者さんに対してのサービスは、神様に対してのサービスと同じです。一人一人の患者さんは大切な存在であるため、医療専門職は一人一人の存在を尊重するべきです。マリア様が、イエス様が生まれる前から死ぬまで一緒に歩み自分の時間、エネルギー、愛を使いながら支えたように、カトリックの理念で育てた看護師、助産師、保健師、管理栄養士も学んだ知識・技術、愛をとおして支えるべきです。この目標の為に、学校のカリキュラムの中で、科学的な情報だけでなく、スピリチュアリティについての学習も大切です。なぜなら、人間は身体と魂の二つの部分があるからです。身体の健康もあれば、魂の健康もあります。身体的な痛みもあれば、スピリチュアルペインもあります。看護の理論家であるナイチンゲール、ヘンダーソン、シスターカリスタロイ、ジーン・ワトソンなどが人間のスピリチュアリティを認めていました。

キリスト教の理念に基づき教育する機関で医療専門職になるためには、外側の変化だけでなく内面の変化も大切です。医療専門職は、自らの成長と変化を重ね、神様に捧げものをしていくことが生きがいや目的であり、社会の貢献にもつながるのです。

## つれづれ考

本学教職員による  
レコーラム(第17回)

## ヴァチカンの禁域探訪

学生の頃、ローマのシステリーナ礼拝堂を訪ねたことがある。天井壁画を眺めていたとき、見知らぬ日本人の神父様に「ご案内しましょうか」と呼びとめられた。私は神父様に導かれてヴァチカンの禁域へと足を踏み入れた。

どうやら神父様は教皇ヨハネ・パウロ2世のもとで通訳の仕事をしているようだ。まず私は薄暗い礼拝堂に招かれた。それはバオリーナ礼拝堂であった。礼拝堂の側面にミケランジェロの描いた「聖ペテロの殉教」と「聖パウロの回心」があった。当時の私はバオリーナ礼拝堂の存在も知らなかったし、その礼拝堂にミケランジェロ晩年の傑作があることも知らなかった。礼拝堂の正面に聖パウロの言葉が高々と掲げられていた。

Mihi vivere Christus est et mori lucrvm.

観光客の喧騒から隔絶された静謐な礼拝堂で「私にとって生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです」(フィリピ書1章21節)という聖句を見上げたとき、ほんの一瞬、私の中で時間が止まり、あたかも天上の世界から聖パウロの肉声が聞こえてくるかのような不思議な感覚を覚えた。

バオリーナ礼拝堂を出ると、ある廊下の壁に隠し通路が見えた。二人並んで歩けないほど通路は狭い。神父様は「これはパパ様が暗殺者から逃げるときの通路なのです」と語った。歴史を紐

解けば、教皇の地位を礼束で買った教皇もいる。ローマ教皇は多くの信者にとって敬愛の対象であるが、ある人々にとって暗殺の対象である。狭い通路にヴァチカンの光と影をみる想いがした。

多くの部屋を巡りながら、私はサン・ピエトロ広場を眼下に望む教皇の書斎を訪れた。毎週日曜日にローマ教皇が巡礼者に手を振るバルコニーが窓越しに見える。この書斎の奥に私を招いた神父様は「ご覧なさい」といった。そこにはラファエロの遺作《キリストの変容》があった。神父様は「これがラファエロの真作です。ヴァチカン美術館の作品は模写です」と言い切った。

ラファエロの「キリストの変容」はヴァチカン美術館の中にある。それが美術の常識だ。しかしここにも確かに《キリストの変容》はある。どちらが真作で、どちらが模写なのか。もし神父様の言うとおりだとすれば、教皇庁は嘘を付いていることになる。しかし教皇庁が嘘を付くだろうか。いや待てよ。教皇庁は歴史の間に天才ラファエロの何かを葬りたいのかもしれない……。

あれこれ考えながら時間だけが夢のように過ぎた。私は神父様に感謝の言葉を述べてヴァチカンを去った。——栄光と悲惨に彩られた欧州の歴史はローマ教皇の歴史である。あのとき神父様が語っていたラファエロの真作《キリストの変容》は歴代ローマ教皇が秘匿し、今も静かにヴァチカンで眠っている。

教養教育科 小原 琢



天使大学

看護栄養学部／看護学科・栄養学科  
大学院／看護栄養学研究所・助産研究科(専門職学位課程)

〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30  
TEL.011-741-1051 FAX.011-741-1077

第32号 2022年3月1日発行 天使大学広報委員会

<https://www.tenshi.ac.jp>

